

木曾川



宝暦治水250周年特集号

宝暦治水250周年 寄稿

近世大名と手伝普請

この過酷な課役の悲慘度

愛知学院大学名誉教授 林 董一氏

宝暦治水250周年記念 座談会

日本近世史から見る宝暦治水、
その新たな姿

TALK&TALK

奄美諸島の黒糖栽培と薩摩藩支配

名瀬市文化財審議委員 弓削 政己氏

歴史は時空をこえてつながる

大島郡和泊町歴史民俗資料館 先田 光演氏

宝暦治水顕彰活動

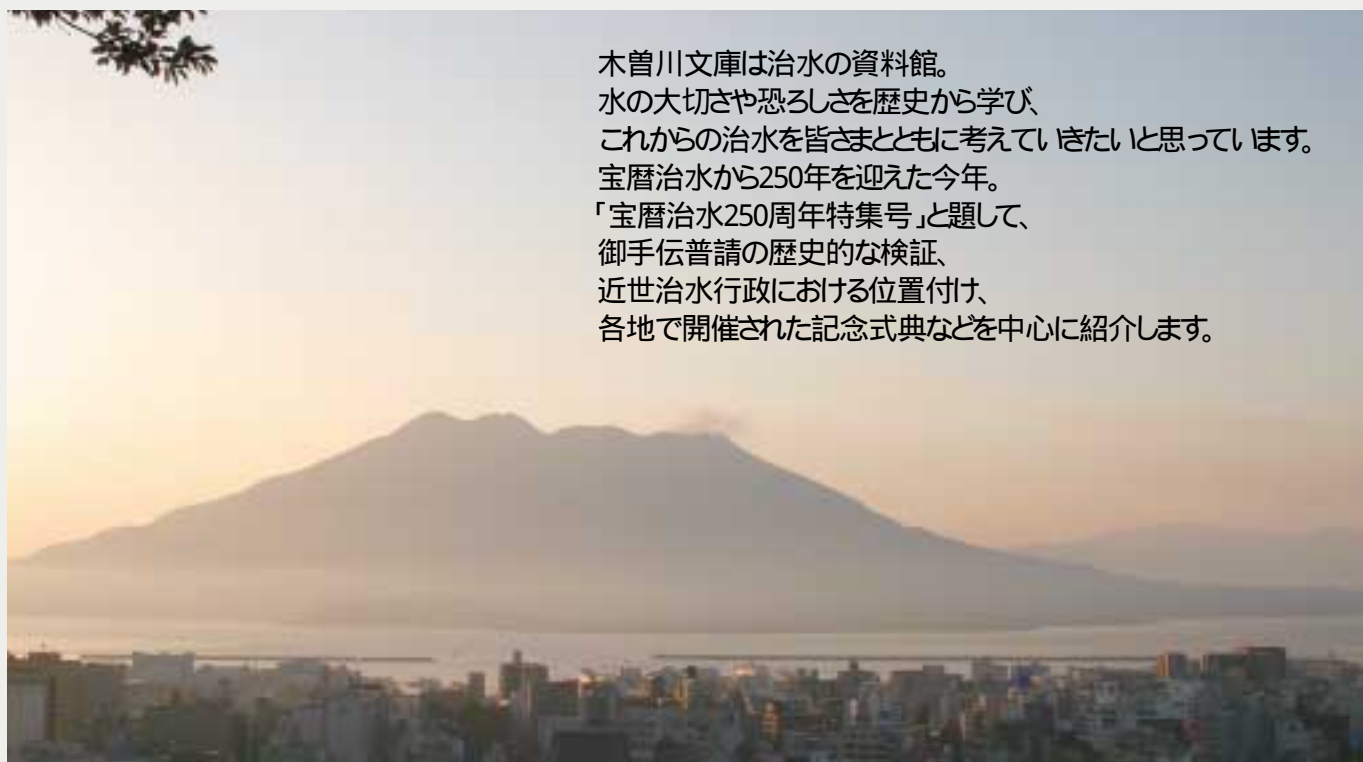
宝暦治水に学び、その偉業を後世へ。

宝暦治水250年という記念すべき年に寄せて

宝暦治水の絆をさらに未来へ。

(薩摩義士250年祭 鹿児島市平田公園)

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆さまとともに考えていきたいと思っています。
宝暦治水から250年を迎えた今年。
「宝暦治水250周年特集号」と題して、
御手伝普請の歴史的な検証、
近世治水行政における位置付け、
各地で開催された記念式典などを中心に紹介します。



宝暦治水250周年 特集

宝暦治水二五〇周年 寄稿

近世大名と手伝普請

この過酷な課役の悲惨度

愛知学院大学名誉教授 林 董一氏



林董一氏
 一九二七年名古屋生まれ。法学博士。中日文化賞、明治村賞、東海アソビ文化賞受賞。愛知県文化功労者。

私は「手も」といって、護山神社御由緒との題を付した、和としての小冊子を持ちあわせる。護山神社は本殿が濃州裏木曾現岐阜県恵那郡付知町に鎮座、大正十一年（一九二二）五月、郷社から県社への昇格を願い、官司や氏子総代たちにより編まれたものらしい。

天保九年（一八三八）三月、江戸城西の丸焼失。こは遺徳後も、なお隠然たる権力を保持する大御所徳川家斉の住居、幕閣は再建を急ぎ、尾紀水の徳川御三家、前田家をはじめ、大名諸家にたいして普請手伝を命じた。

すべし、本題を離れる。普請手伝は大名に賦課する課役の一種。大名は主君たる將軍に奉公の誠を尽くす一方、封土を受け、各種の課役を負担した。課役には、軍役と公役とが、軍役は將軍のために出征する外、幕令に応じて、一定数の人馬武器を差し出す義務しかし、平和が続くにもないしだに形骸化、公役は通常必要の都度、大名家をえらんで課せられた。江戸城門番、同火消、閑所支配、長崎警固等、なかでも普請の助役は

どの大名でも、最大の災厄として恐怖の的であった。

普請手伝、それは幕府が実施する大規模工事に、資材、労力、あるいは金品を提供すること。はじめは当局の指示のままに、割り当てる工事現場に家臣を派遣し、人足代を主とする入用金を支出した。ところが、時代が移るにつれ、簡略となり、金納化される。施工は幕府で受け持ち、手伝側の関与するとはない。高割りの分担金上納だけで済む。

話を戻そう。幕府は殿舎再建につき、尾張家に九万七九六四両を課し、その範囲内で建材の検を調達せよと命じた。当時は將軍家慶の治世、尾張家では家斉一丸男音温が当主の座に。普請物奉行の老中水野越前守忠邦の意を体し、勘定吟味役の川路三左衛門聖謨が来任。入場がきびしく制限された。熱田白鳥木場で存分に選木。そして市場はもとより、他山でも入手できない大材は、藩領裏木曾、恵那郡加子母村地籍、井出小路山で伐採することにした。こは、村民とさえ近づかない聖域、お囲い山。川路は谷敷



天保9年木曾大材井出小路伐出之図巻（名古屋博物館所蔵）
 江戸城西の丸再建用の檜を伐り出したときの様子を描く。

なく踏みこみ、樹齢一〇〇〇年をこえる巨樹に、次ぎと斧を入れた。森の民の憤怒は絶頂に達し、報復に立ちあがる。川路の手記によれば、切り口から鮮血がほとばしり、たか夜、小屋に怪獣が出没したとか、それはかりではない。將軍家大奥に、連続して異変も。あまりかねた、家慶、天保一四年（一八四三）九月、付知の地に本社を造営し、木曾全山の守護神に定む。これが護山神社だと、御由緒は結ぶ。

さて、尾州からの献木は金に直して一〇万六千七百四十両と推定され、限度を大きくこえる。ただ、さえ窮乏にあえぐ藩庫は、たちまち危機に。しかも、である。他

領の霊山を汚し、神木をまるで強奪するよつな、幕史の専横、唯唯諾諾と許す。藩首脳は無気力、無節操。怒り心頭の家士の一団は決起し、親幕派に対抗、抗争は奔流となり、幕末、勤王の藩論統一の飛瀑を目かけ、流下していく。

私は、おもつ、西の丸助役一件は、尾張人士の心のひだに、深い傷跡を残したことは、紛れもない事実。と、だが、しかし、と続けておもつ、遠く異郷の普請場に、良臣を直接送ったうえ、八十余名の犠牲者を出し、四〇万両もの巨額を費消させられた。宝暦の薩摩藩治水工事は、よつつか、悲惨さでは、これをはるかにしのぐのでは。と、私は濁流と死闘の限りをつくし、使命をはたした、義士の燦然たる偉業を、あらためて一段とまぶしく眼に感じぬ。

参考文献
 『日本法制史概説』 石井良助著
 一九八三年 創文社
 『近世林業史の研究』 所三男著
 一九八〇年 吉川弘文館
 『新修名古屋歴史』 第四巻
 新修名古屋歴史編集委員会編
 一九九九年 名古屋大学
 『治水四法』と普請

座談会

宝暦治水250周年

日本近世史から見る宝暦治水、その新たな姿

近世史上最大級の宝暦治水から二五〇年。薩摩義士の顕彰活動は明治から始められているものの、幕藩体制の中であるいは薩摩藩政史の中で位置付けなど、歴史的な検証には、まだまだ大きな課題が残されているよつです。そこで座談会では、日本近世史における検証を主眼に、新たな宝暦治水像を探求します。

近世史上最大級の治水工事

司会：本日はお忙しい中、ご参加いただきありがとうございます。座談会では、薩摩藩に普請の命令が下した経緯や、薩摩藩政史から見た宝暦治水の財政的な問題と、その解決など、さまざまな問題を検証し、新たな宝暦治水像を探求していきます。本日はよろしくお願いいたします。

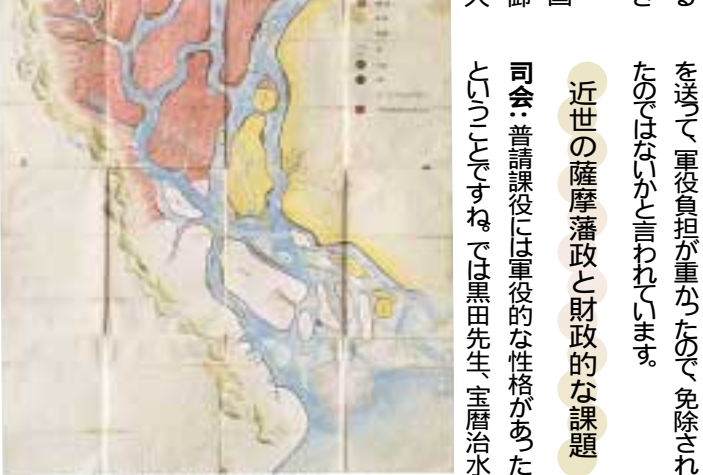
宮本：宝暦治水は、わが国治水史上最大の難工事です。幕府は、宝暦三年（一七五三）二月、五日に薩摩藩に御手伝普請を命じ、総奉行平田勲負をはじめ、九四七名の藩士

により、翌年二月二七日に工事をはじめました。対象区域は木曾三川下流域ほぼ全域に及び、工事は大きく二期に分けられます。期は、今日の災害復旧事に相当し、輸中の堤防を修復しています。期は、改修事業に相当し、中心課題である油島締切工事、大樽川洗堰工事、逆川締切工事などを実施しました。宝暦五年三月二十八日に工事は終了し、五月二日までに幕府の検分を終えて引き渡され、完了しています。

林：中世以前は、各地に領主の支配領域が小さく分立しており、特に木曾三川のように流路が広域にわたる大河川の場合、個々の領主では、治水工事をを行うのも難しいわけですが、それが可能になったのは、江戸幕府の成立以降、統一政権としての幕府が、小領主や大名たち、さらには農民たちを駆使して、統一的に木曾三川全域の治水工事を、一気に進められるようになった。統一政権の樹立が、最も大きな原因と言えます。

林：尾張藩の国役普請は、寛永一四年（一六七七）から免除されます。尾張藩は大藩ですから、領内の木曾川の管理は可能であるよつと、いつかで免除をつけたよつです。そのほか、美濃の大垣藩、高須藩も国役を免除されます。大垣藩は、島原の乱に三〇〇〇人余りの兵を送って、軍役負担が重かったので、免除されたのではないかとされています。

薩摩藩御手伝普請目録見絵図



江戸時代の治水行政

司会：近世史上最大級の工事がなぜ江戸幕府のもよつ可能になったのか。林先生、その点をお聞かせください。

座談会出席者 / 林順子氏（岐阜大学非常勤講師）、黒田安雄氏（愛知学院大学文学部教授）、宮本高行氏（国土交通省木曾川下流河川事務所 事務所長）、司会：大原純子（KISSO編集担当）（文中敬称略）

宝暦治水の改修の目的は、木曾三川下流域の地域特性上、三川分流にありましたが、完全に分流はできなかったのですが、三川分流の第一歩として、明治以降の近代治水の先駆けになったと評価できるとしています。



すまず洪水の逃げるところが狭くなって洪水のときに水かさが増すとどうこうに悪循環に陥り、水害がひどくなっているのださうと思えます。

司会:新田開発の1の副作用で洪水が増えているのでしょうか。

宮本:一八世紀の最盛期には輪中が最大八〇箇所くらいあったと言われており、御手伝普請が始まる少し前の記録では一五五年間に三回洪水があった。一年に一回以上という記録も残っております。このため治水対策は輪中の住民や藩単位では解消できないというので、享保二〇年(一七三五)に井沢弥惣兵衛為永という紀州出身の治水技術者が美濃郡代として笠松郡役所に着任。木曾三川を調査し治水計画を提案しています。この計画に基づいて宝暦治水が行われたのです。

以上の話以外に、別の観点から地域の特性を申し上げておきます。この地域は古来、大規模地震を受けますと、その影響で時として地盤沈下を起しています。それによって水害に遭いやすい土地になっていく。かつてはある程度農業も安定的に営めるのに土地もあつたようですが、それがだんだん水害に襲われる土地になっていきました。

実は私が一番疑問に思いましたのは高須輪中に高須松平藩が置かれていたことです。これは格の高い藩、尾張藩の分家である名門をなぜ洪水常襲地帯、御囲堤の外に置いたのがわかりませんが、それが専門家の方に伺っています。

高須松平藩の起源は一六八一年に尾張

藩の分家として独立した信州松平藩で、現在の長野県域に領地三万石を有していた。ところが恐ろしく生産力が低い土地だったので、もう少し安定的に経営できる土地に移りたいというのを親元に泣きつき、元禄三年(一七〇〇)には今の高須輪中に引越した。それが高須松平藩のスタートです。しかしわずか七年後に宝永の大地震に見舞われます。

司会:宝永四年(一七〇七)、最後に富士山が噴火したという有名な地震ですね。

宮本:この地震は大変大きなリフト型の大地震で、地盤が三〇cm以上下がり、その後水害が増えて不毛の土地になっていくという記録があります。

尾張藩の治山治水政策

司会:地震による地盤沈下と洪水とは密接な関係があるわけですね。洪水を考えると、まず治山治水、山を治めないとこう考え方がありますが、当時の木曾川の上流域、木曾山はどんな状態だったのか、木曾山は尾張藩の管理でしたか。

林:尾張藩は、寛文と享保の二回にわたって大きな林政改革を行っています。特に享保改革は、林山資源を尾張藩の恒久財源として保護していく。つまり、留山を作ったりしています。

司会:留山は入山が禁止された山ですね。
林:入山が許された山についても、尾張藩はいわゆる木曾五木と言われる停止木、つまり伐採禁止の木種を指定しています。このほか松なども、伐採には許可が要りました。これ

は林政改革としては一度目となる享保改革での話で、一度目の寛文の林政改革のときには尾張藩用の材木伐出しはむしろ増加しています。この頃はまた、山林荒廃は洪水発生の原因としては深刻に受け止められてはいなかったようです。

司会:江戸という平和な時代を迎え、城下町の再建ラッシュが起り、その資材として木曾山の木が刈りだされた。それが洪水の原因にもつながっているのでしょうか。

林:城下町や寺社建設などのため、一七世紀前半には全国的な建築ブームが起き、木曾山からも大量の材木が伐り出されました。木曾材の伐出し、販売は、尾張藩の収入にもつながりますので、一七世紀中には、木曾山荒廃に対する尾張藩の認識もまだ甘いところがありました。本格的な治山が進んだのは一八世紀の享保林政改革以降のことです。

未曾有の公共事業に湧きたつ地元

司会:宝暦治水は総工費が四〇万両と言われています。現代の事業と比較してどのような規模だったと所長はお考えですか。

宮本:当時の一両は現在に換算すると七万円から一〇万円くらいと言われています。仮に一両を一〇万円とすると、総事業費が四〇億円になります。これをどう評価するかですけれども、宝暦治水では、夏場は工事でさながら、実質約半年くらいの期間で工事をしているわけです。現在の長良川河口堰を例に挙げます。最盛期でも年間の予算が二五〇億円でした。これも非洪水期の半

年くらいにわたっていますので、大体同じです。同じ期間でしかも機械力の乏しい昔に四〇〇億円相当ですから、宝暦治水の工事の規模の大きさがつかいがい知れるのではないかと思います。

司会:四〇億円もの公共事業が起きるとなると土木の人数を集めたり、支払いをしたり、大変な苦労があったと思われませんか。

林:宝暦治水の前から、幕府が行う普請事業のなかで、御救いという言葉がよく使われるようになります。住民の経済的救済が普請の目的の一つとされるのです。

司会:地元の人たちを積極的に雇用していたのですか。

林:例えば、寛保二年(一七四二)、関東の利根川はじめ各河川流域で大規模な水害が起き、幕命によって多くの西国大名が普請工事に駆り出されました。そのときにも、御救いが工事の目的の一つとなりました。老人、女子どもでも、普請場で土を運べば賞錢をもらえると、困窮した人々が押し寄せました。混雑のなかで娘さんが気絶をし、その普請場を担当していた岡山藩がわざわざ藩医をつかわして介抱したり見舞金を出したり、といった事件まで起きています。駆り出された大名たちも、地元民に何かと気を使っていたわけです。しかし、村人たちが参加する村請負での普請では、作業効率低下します。この関東における普請の藩吏たちの地元民への配慮、そして村請負という工事方法は、宝暦治水にも共通する点でした。

司会:技術職ではなく、素人ですから効率が

悪い知らせ

林:女子どもは、きりぎりすといふ少量の土運びは、いっせいです。関東で行われた普請工事で、駆り出された西国諸藩が音をあげて結局、専門技術を要する部署については有力農民や町人などの専門業者が担当する。町方請負が採用されるようになりました。宝暦治水でも、幕府は薩摩藩に、御救いの名のもと、村請負の工事を強ひ、それによってもちろんだ元住民は経済的に救われるのですが、薩摩藩としては出費が大きいです。そこでやはり、高度な技術を要する部分だけについては町方請負の採用が許されました。

困難を極めた資材調達と搬送

司会:薩摩藩の技術者を雇用すれば藩にお金が還元されますが、地元には払えば何のメリットもないということになりますね。しかし、それだけの大事業が起れば、人手不足はもちろんだ材料や船の調達など大変だったと思えます。

林:石材は、油島締切り工事だけでも約二万坪、全体では五万坪を要したと言われています。石材の調達先は、近いところでは石津郡つまり高木家の居村の近くです。遠方では、長良川の岐阜下流付近です。石材調達については、なぜか地元民が運送作業の参加を嫌がり、作業が遅延したようです。材木は、木曾川支流の可兒川付近などの幕府領から伐り出された松が使われました。その運送には、どうしても木曾川を通らざるを得ず、しかも尾張藩は木曾山の松を、伐採規制の対象としていますから、史料には残っていないも

の運送時には間違いない、木曾川各所の尾張藩川番所で検閲を受けたでしょう。それもまた、薩摩藩については面倒事のひたひたと思われます。もちろんだ、尾張藩家臣と縁戚関係を結んだ高木家が、うまく立ち回った可能性も考えられます。

宝暦治水の土木技術的評価

司会:では土木技術の面ではいかがだったのでしょうか。

宮本:木曾三川の複雑な流れをできるだけ三つの川に分けていくという発想は基本的に明治改修に引き継がれておりますので、思想としては先駆的なものと評価できると思えます。ただ、当時の治水技術の考え方には、今日から見ると少し至らないところがあったと思えます。

その最大のものが洪水の流量という概念がなかったことだと思います。水が流れている面積と、入丁とを合わせた流量で評価すること、このことがなかった。そのため、農民は開発した新田を守るために輪中堤防を高くしていく。そうすると、水の流れるところがどんどん狭くなり、洪水がひどいほどなるといってを繰り返したと思います。

また、もう一つ申し上げますと、川の水は細かい土砂も一緒に流す動きがあります。この評価も抜けていたかなというところで、大樽川に洗堰をつくりました。それによって従前よりも長良川の水かさが増し高くなり、たがその影響で従前よりも流速が遅くなつた結果、その中に含まれている土砂がたまるようになり、そのために川底が高くな

って中流の方で洪水が発生するという事態も起つたようです。そういうことが当時の治水の問題点だったかと思えます。一方、薩摩藩の仕事ぶりはどうだったかと言いますと、工期が大変短かった。工事規模が大きかった難しい工事でも多かったということから判断しますと、施工能力は極めて優秀であったということではないかと思えます。

実は五月二五日に、鹿児島市内で恒例の薩摩義士の慰霊祭がありまして、私も鹿児島へ行ってきました。その折、鹿児島湾の北にあります国分市でもおもしろいことを伺っていました。

宝暦治水の一〇年ほど前、現在の国分市一帯を流れている天降川の河道付け替えと新田開削という大工事を実施したようです。その結果、干拓地が生まれ、豊かな穀倉地帯になって薩摩藩の財政を支えたようです。

市長さんの個人的なお話ですが、薩摩藩に白羽の矢が立たたときの検討の判断材料の一つは、一つは一つは天降川の工事もやっているという実績も、あるいは一項目に入っていたかもしれないことでした。実際、明治改修を立案したアレキスは、油島の締切堤や石田には猿尾という水制があるのですが、それらを変興味深く観察したようです。から、当時の技術に対しては評価していたのではないかと思えます。

司会:薩摩藩に固有の技術があったというお話ですが、その点を黒田先生にお伺いします。

黒田:土木技術史の研究は一番遅れている分野だろつと思っています。尾張藩や美濃の新田開発は江戸時代の早

い時期に行われていますが、薩摩藩は遅れています。宗教的あるいは経済的な利害関係が存在して、新田開発の実施が遅れたようです。所長さんがおっしゃったことは比較的に早い時期に開発されたことで、下流の地域は、江戸時代も天保改革のときに、干拓事業を行っています。

一方の特徴として、早い時期からの薩摩と中国の交流が挙げられます。江戸時代に入り、明から清への交代期になりますと、明朝に関係深い人々は清朝の中国へ帰れなくなり、商人とか医者その他、鉱山技師とかもかなりいます。そういう風土ですから、固有の土木技術をもった人々も多くいたと考えています。もう一つは、領内各地に金山があり、また、この金山は元禄の頃までほとんど掘り出されています。北薩の永野や串木野の宮ヶ野等に領外から多くの金堀り人が入っていました。串木野などは耕地にくらべて、人口が多かったというところもあり、江戸時代中後期になると、開墾請負みないな形で人々が領内各地に出掛けています。江戸時代中期から明治まで続いた伝統です。開墾、土木については、それなりの技術があつたようですが、文書的な裏づけが難しいですね。

司会:土木技術の歴史的な検証がまだできていないところですね。ただ、金山や新田の開発には、長く滞在した中国人の技術も活用されていたのではないかと。

黒田:薩摩藩の場合、寛永時代よりも後のころまで侍の分限帳に中国の名前前で堂々と載っているのです。鎖国になつても時代に載つて

宝暦治水250周年





奄美諸島の黒糖栽培と薩摩藩支配

名瀬市文化財審議委員 弓削政己氏



弓削政己氏
一九四八年生まれ。
鹿児島県大島郡知名町出身
大島郡大和村誌編集委員
大島郡瀬戸内町誌編集委員
論文「奄美から見た薩摩支配下の島嶼群」など。

琉球・奄美と薩摩藩

奄美は一五世紀中ごろから琉球王国統治下であった。薩摩藩は慶長一一年（一六〇六）には領土拡大として大島支配について談合をしていた。一方幕府

米と黒糖

当初藩は奄美の貢租を米としていた。そのため水田用水のための溜池づくり、新田開発に力を注いだ。寛永一〇年（一六三三）の勤農のため大島に派遣された有馬丹後純定や現龍郷町の田畑佐文仁の新田開発などがみられる。宝永三年（一七〇六）、貢米が不可能な場合は粟・特産品の尺苴（よじ）、芭蕉、小麦、黒砂糖を代わりにしてよいといった状況であった。



開鏡 ひととみ 神社 鹿児島県大島郡大和村 力が国糖業の元祖である、直川智翁を祀った神社

黒糖生産でも貢租として黒糖の比重が高まり、延享二年（一七四五）貢米は全量黒砂糖とされた。その方法は黒砂糖を藩が買い上げ、その量を米で換算し、そこから貢米分相当を差し引いた残りを米で島民に支払うものであった。しかし、附加税などで実際は島民の多くは米を食することはできなかつた。当初、奄美の五

黒糖栽培の始期

伝承としては慶長年間に現大和村の直川智翁が琉球へ行く途中、中国へ漂着し

島中、喜界島、大島、徳之島三島で黒糖生産の砂糖キビ栽培がされたが幕末には奄美全体に栽培された。それまでは奄美の沖永良部島と論島は米中心の施策で奄美の砂糖キビ栽培の三島への米の供給地の役割を担わされた。

砂糖キビ苗と黒糖製糖法を持ち帰りひるめたとある。しかし、産業として成立したのは、元禄一年（一六八八）か翌年、現大和村の嘉和知三和良が琉球へ行きキビ植付、砂糖製法稽古以後である。

宝暦治水時の奄美

宝暦四年（一七五四）徳之島の東西両間切の最高統治者である在地役人の与二人名、また横目、目指役が前年の田の収穫高に比べて鹿児島まで呼び出されるところが異例のことが起きている。また同じく徳之島では数年来の飢饉に続き、宝暦五年（一七五五）の台風で男女三、二〇〇人余が死亡、一、七〇〇人程が大島へ逃げ去り、牛馬二、〇〇〇頭余が死んだ。藩はその手当てとして琉球から飢饉米を五〇〇石借用させている時期である。宝暦治水の工事費には奄美の黒砂糖がかなりのウエイトを占めていたと推察できるが、その後ますます増加する薩摩藩の負債返済に大きな役割を果たしていたのである。

歴史は時空をいじめてきたがる

大島郡和泊町歴史民俗資料館 先田光演氏



先田光演氏
一九四二年、鹿児島生まれ。
小中学校に勤務、平成一五年三月中学校長を退職。
著書「奄美の歴史とシマの民俗」など。



岐阜市と交流した知名町の学童文集

メリカ軍政下にあった奄美諸島の島民は民族運動として日本復帰運動を立ち上げ、激しい運動を展開していた。

この運動の結果、昭和二十七年に入ると奄美諸島の日本復帰実現の兆しが見えてきた。ところが同じ奄美諸島奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島の中で南部に位置する沖永良部島と与論島は復帰から除外されるといって新聞報道が伝えられ、島民は寝食を忘れて熾烈な運動に明け暮れた。町長を東京に急遽派遣して、各方面への陳情を繰り返した。

このような復帰運動のなかで特筆すべきことは、児童生徒が日本復帰の願いを作文に託して本土の報道機関や教育関係者へ送り、本土の子供たちはばかりでなく、大人の世論喚起にも大きな効果をもたらした点である。

当時の岐阜市長、東前豊は本島の出身者であった。島の子供たちは四〇余通の本復帰の作文を東市長に送っている。市長はこれらの作文を各学校に配布して読み聞かせを進め、さらに激励の手紙を書いてもらった。そして、子供たちの温かい励ましの手紙は奄美諸島へ送り届けられている。手紙はかりでなく、学用品や本や雑誌も送られてきた。島の子供たちの喜びはたぐえぬものがあった。

昭和二十八年二月二十五日、悲願の日、本復帰が実現した。もちろん南部一島もいよいよ本土へ復帰することができたのである。復帰が実現すると島の学校に救済物資が送られてきた。岐阜市から送られてきた救済物資の手紙は次のように綴られていた。

「江戸時代、薩摩藩が木曾川の治水工事をしてくれました。たぐい難儀なお金のかかる事でしたが、その財源となつた

のは奄美の黒砂糖であったことを先生から聞きました。自分たちが今豊かな暮らしの出来るのは奄美の人々のおかげであることを知ったので、その恩返しに、皆でお金を出して買って貰ったものです。」

（大城小学校創立百周年記念誌より）
今から五〇年前、木曾川治水の縁で岐阜市の子供たちと日本復帰を果たした奄美の子供たちがつながっていたのである。

宝暦の治水工事は、その財源を奄美諸島奄美大島・喜界島・徳之島の黒砂糖に求めた。この治水工事をきっかけに莫大な借金を抱えた薩摩藩は、再び黒砂糖の収奪によって天保の改革を成功させ、倒幕運動の資金を生み出した。その後、富国強兵を推し進めた藩主島津斉彬は、沖永良部島にも黒砂糖を生産上納させて資金源にしたのであった。

このように歴史の糸が遠く離れた瀬尾平野と奄美諸島を結びつけていたのである。その不思議な糸にしが、宝暦治水二五〇周年に再び確かめられたのであった。
（沖永良部郷土研究会会長）



和泊町歴史民俗資料館展示風景

宝曆治水に学び、 その偉業を後世へ。

長良川・揖斐川の背割堤に沿って深い緑を香らせる千本松原は、薩摩義士が故郷から取り寄せた日向松を植えたもの。台風による倒木や枯死などの災害を乗り越えて、その偉業を今に伝えていきます。明治初期に始まった顕彰活動も一五〇年の歳月を超え、ついに未来へ、宝曆治水を遂行した崇高な精神は、人と自然との共生を、私たちに改めて問いかけているようです。

地元の義士顕彰

宝曆五年五月二日に全てが完了した宝曆治水。しかし、その顕彰と薩摩義士の慰霊は、明治という時代を待たねばなりません。この御手伝普請に費やした莫大な費用、そして多数の殉死者、余りに多くの犠牲を払った治水事業は、それらの理由などから薩摩において評価されず、恩恵を受けた木曾三川下流域の地元民が、「薩摩様」とわずかに口伝える程度でした。

明治に入り顕彰を初めて開始したのが、一〇代西田喜兵衛です。西田家は三重県桑名郡多度町の素封家で代官を務めた家柄であり、宝曆治水当時、その祖先は平田朝負の良き相談顧問方として、協力を惜しみませんでした。「薩摩藩の恩を忘れるべからず」。三代喜兵衛が当時の状況を丹念に記した記録は、西田家の家宝として代々秘蔵されましたが、残念なことに、明治九年（一八七六）の伊勢暴動により焼失しています。

この事実が、一〇代喜兵衛の義士顕彰への始まりです。

義士の事蹟顕彰を志した喜兵衛は、明治一七年（一八八四）頃より史跡、墓地資料の収集に奔走する一方、記念碑建立に向け、精力的な活動を行いました。上京を何度も重ね、島津公爵家や松方伯爵家などに協力を要請。また地元の官庁、一般の人々の協力を得て、宝曆治水工事中最も難事であった四之手油島締切堤防の先端に、「宝曆治水碑」が建立されました。

碑の除幕式は、木曾三川下流改修明治改修による木曾三川分流がほぼ完成した明治三年（一九〇〇）四月、時の総理大臣山県有朋、内務大臣西郷従道をはじめ数多くの高官の参列を得て、厳粛にしかも盛大に挙行されました。

宝曆治水碑建立を端緒に、顕彰活動が活発化。明治三年には大樽川洗堰跡に「薩摩堰遺跡」の碑を建立、昭和三年（一九二八）には、薩摩義士二二名が

眠る海蔵寺に忠魂堂を建立、昭和一三年（一九三八）には、治水神社を創設。同年五月一日には創設奉祝祭が国及び県の高官臨席のもと関係者多数の参列を得て盛大に挙行されました。

鹿兒島県の義士顕彰

鹿兒島県での顕彰活動が始まったのは、大正六年（一九一七）、薩摩義士顕彰会が結成されました。

顕彰活動が遅れた大きな原因は、旧藩時代はおろか明治の初めまで、工事については、一切他言すべからずとして、嚴重な緘口令が引かれていたためです。幕府への配慮が大きな原因だといわれています。また、治水資金調達のため藩当局は過酷なまでの重税を課し、藩民に怨嗟の空気があったこともいがめません。しかしながら岐阜県の顕彰活動の影響を受けて顕彰活動の機運は高まり、大正六年には最初の薩摩義士顕彰祭典が開催されました。大正九年（一九二〇）には、鹿兒島市城山山

麓に、宝曆義士碑を建立。この碑の中には、幕府の役人であり切腹した内藤十左衛門、竹中伝六の両名が合祀されています。これは薩摩藩の精神、敵味方差別なき供養が受け継がれたものだと考えられています。

昭和二年（一九四七）には、平田朝負屋敷跡に平田公園を建設。昭和一九年には二〇〇年記念式典が平田公園で行われました。式場には平田朝負の子孫平田正風氏当時一七歳をはじめとした遺族も出席。この年、平田公園に平田朝負銅像も完成し、除幕式が行われました。また、記念事業のひとつとして、鹿兒島市長が治水神社境内の千本松原から持ち帰ったヒメ小松七本を記念植樹。翌年には平田翁にちなんで命名した平田橋が完成。平成六年には薩摩義士二四〇年祭。同九年には大中正に薩摩義士墓建立。平成一六年には二五〇年記念祭が盛大に挙行されました。

華々しく挙行された二五〇年記念式典

宝曆治水二五〇年治水神社春季大祭 四月二十五日



除幕式

が完成し、碑の除幕式が行われました。その後、太鼓の演奏、薩摩古武道・薬丸野太刀示顕流の演舞、詩吟などが奉納されました。また、海津町の小学生のグループが宝曆治水や明治改修の研究成果を発表しました。

薩摩義士二五〇年目の凱旋事業出発式

「薩摩義士二五〇年の凱旋」の出発式が治水神社境内で行われました。これは、一般公募者を含めた海津町青年のついで協議会会員らが、薩摩義士が歩いたルートを逆に自転車で行くというものを、故郷へ戻れなかった義士の思いを果たすとともに、義士の偉業を称えようと企画されました。リレーは一ヶ月後、平田朝負の命日の五月二十五日、鹿兒島市平田公園で開催された薩摩義士二五〇年祭式典前に「ツール」しました。



研究発表する地元の小学生グループ

宝曆治水工事に殉じた平田朝負他薩摩義士八〇余名に感謝を捧げる治水神社春季大祭が、岐阜県薩摩義士顕彰会会長 梶原拓岐（岐阜県知事）の主催のもと行われ、義士の遺徳を偲びました。この日、宝曆治水工事犠牲者「の碑九二名」



御輿の奉納



自転車リレーの皆さん

二五〇年忌追悼法要

桑名市・海蔵寺 四月二十五日



海蔵寺の法要

人が参列。薩摩藩主の直系子孫、島津修久氏は、薩摩義士の崇高な精神は、今も脈々と受け継がれている」とあいさつしました。法要後は初めて参列された平田朝負の子孫、平田朝久氏から贈られた平田家の家紋を披露。桑名歴史の案内人・初代会長の加藤勝己氏の記念講演も行われました。

海蔵寺は曹洞宗の古刹です。薩摩義士の墓石二四基が現存し、桑名市の指定史跡となっています。法要は毎年、平田朝負の命日に、地元の顕彰奉賛会が営んでいます。しかし、今年には鹿兒島市の慰霊祭がこの日に行われることから、二五〇年忌追悼法要は、例年より一ヶ月早い四月に実施しました。藩士の子孫や鹿兒島県顕彰会関係者ら三〇〇



焼香の列をなす人々

宝曆治水二五〇年について 記念すべき年に寄せて

異国の治水事業に命を賭した薩摩義士の精神に学ぶ

治水神社 宮司 山内久和氏

明治中期から後期にかけて、木曾三川下流域では顕彰活動が活発になり、神社創設の動きも出てきました。大正一四年（一九二五）には有志により宝曆治水奉賛会が設立され、広く全国に基金を募り、建設への動きが具体的にになりました。宝曆治水の犠牲者は八〇余名といわれていますが、その方たちを「祭神に



と」することで、内務省へ幾度も陳情を重ねています。しかしなかなか許可は下りません。多くの人々を「祭神にすることができない」というのが大きな理由だったようです。結局、治水神社が創設されたのは昭和二年（一九二七）四月。総奉行平田鞆負を「祭神」とすることで許可されました。昭和二年に着工したにも関わらず、十数年の歳月を擁したのはいったいどのような事情があったからなのでしょう。

現在は、毎年四月二十五日に例祭春季大祭を、一〇月二十五日には例祭秋季大祭を開儀。宝曆治水二五〇年を迎えた今年は関係者約三千人が参列して義士の遺徳を偲びました。心算は大江地区外浜の瀬古市郎さんが選ばれました。瀬古さんの数え年は平田翁が自刃した五二歳。神男をあえて心男としたのは平田翁の精神に学ぶため、殺伐たる現代だからこそ、異国の治水事業に命を賭した義士の精神を学ぶ

必要があるのです。式典では海津町の小学生のグループが宝曆治水や明治改修などの成果を発表していますが、子どもたちが中心となって義士の精神を地域へそして未来へ伝えていくことを目指しましょう。治水神社は薩摩義士の史蹟である千本松原の一面にありますが、「ここから見る日の出は本当に素晴らしい。温暖化や酸性雨、外来の害虫など環境破壊が進む現代だからこそ、治水神社の千本松原として、自然との共生を伝えたいと思います。」

助け合いの心を学びながら、薩摩義士の心を語り継いでいく。

桑名市 海蔵寺住職 田宮正宣氏

明治二六年（一八九三）一七世住職時本慈船（ときもと）とせんと和尚が寺の過去帳を整理中、「薩摩藩士埋葬寺送り」の古証文を発見したことから、宝曆治水の状況が世間に知られるようになった。永吉惣兵衛、腰物にて怪我相果候に付「云々と書かれた有名な「一札之事」の証文をはじめとした一〇名分の埋葬証文で



永吉の命日は宝曆四年（一七五四）四月一四日。宝曆治水最初の犠牲者で、一期工事が開始された二月二七日から三月も経たない間に亡くなっています。海蔵寺の寺史には、宝曆四、五年頃の任職は第二世雲峰珍龍和尚。当時犠牲者の遺骸を葬るにも幕府の手前なかなか難しく、雲峰珍龍和尚が快諾し、ようやく埋葬されたようです。平田鞆負の遺

骸も揖斐川を舟で運ばれてここに遺髪を置いて、京都の大黒寺へ運ばれたといわれています。しかしその真相はよくわからないというのが現状です。特に海蔵寺は禅宗で世襲という風習がなかったため、親から子へと伝承されたものがない。薩摩の武家の多くは禅宗を信仰していますから、それが埋葬の理由なのでしょう。が、なせ揖斐川を運ぶには、桑名市まで来たのか、歴史の謎

といたっています。最近では宝曆治水の評価をめぐっても諸説があるようで、価値観や考え方がよって分かれているようです。お年寄りたちの中には、「薩摩に足を向けては褒められない」という声を聞きます。それこそ、顕彰活動の原点です。海蔵寺には永吉惣兵衛をはじめとした薩摩藩士一四名が眠っています。彼らの心を語り、助け合いの心を学びながら、二五〇年経た今もそして明日も肅々と供養をしていきたいと思っています。

祖先が治水偉業に命を傾けた輪中地帯。その土地改良に取り組んだ半生。 平田家一八代当主 平田正風氏

平田家一八代当主を相続したのは昭和一六年（一九四一）です。わずか六歳の時でした。平田鞆負から数えて九代目にあたります。祖母の八子から家督を相続しました。八子の父は平田正真、天保九年（一八三八）に生まれ、兵員奉行に任ぜられていました。薩摩藩後の明治二年（一九三七）調所広郷の孫にあたる「トモ」婚姻



その二女が八子です。八子が常々言っていたのは「平田家の再興」。幼かった私は薩摩義士のことと全くわかっていませんでした。薩摩義士について勉強を始めたのは昭和三〇年（一九五五）、岐阜県に就職してからです。就職にあたって学校の先生が岐阜県に手紙を書いてくれたのですが、「平田鞆負の子孫である」と書いてあったんです。当時岐阜県には鹿児島出身の総務部長がいらしたのですが、そのせいか

随分私を大切にしてくれて、ありがたやら、肩身が狭いやら。こちらは新入りの職員でしたから、恐縮するばかりでした。最初の配属先は高須輪中土地改良事業所で、最後退職する前に配属されたのも「です。輪中が土地改良していく状況をすべて見届けたことになりました。その変遷をまとめたのが、高須輪中土地改良史」。土地改良史と事業史の二部構成です。編集室長として資料の収集から執筆

編集まですべて担当していました。宝曆治水から二五〇年。歴史的検証をしようにも史料が風化しているため、不明な部分が多い。鞆負の足跡も同様です。そういう意味でも輪中の変遷史を残せたというところに胸に迫るものがあります。しかも祖先が治水事業に命を傾けた土地ですから、顕彰活動は役所主体で行われてきた。だが、一般の人々も自由に焼香や、お玉串奉奠でもできるような、そんな手作りの顕彰活動が広がっていくことを望んでいます。

若い世代に語り継いでいくこと。それが現代の顕彰活動。

鹿児島県薩摩義士顕彰会会長 島津修久氏



鹿児島県薩摩義士顕彰会は大正六年の発足以来、さまざまな活動を。二〇〇回は、強い使命感をもって成し遂げた仕事は非常に素晴らしい成果を残したことです。未だに残る優れた業績を残した。それは鹿児島の人たちが、その時代までもっていた精度の高い測量技術や土木技術など、それらの技術を充分に生かしてお役目を果たした。良い仕事を残した。その二〇〇回に対する誇りといえますか、自分たちの先人が優れた技術・能力をもち、いたのだというこ

行ってきました。宝曆治水二五〇年を迎え、次の若い世代に次の三点を伝えていかなければと考えています。

一つ目は、御手伝普請つまり、幕府から木曾川の治水工事を命ぜられたときに選択肢としては一つしかなかったといふこと。薩摩藩を潰す計画だったのだから、断つて戦うべきだとか、いろいろな議論があったかもしれませんが、選択肢

を語っていきたくですね。二〇〇回は、伊勢湾台風のような大災害に際しても薩摩の人たちが築いた堤防は壊れず、水害から人々をしっかりと守りました点です。それが、縁で、岐阜と鹿児島島の友好交流が活発化しています。こうした友好関係を未長く続けてもらいたいものですね。鹿児島県の二五〇周年記念事業としては三点を実施しました。

一つ目は鹿児島県歴史資料センター「黎明館」における特別展示です。宝曆治水の概要と顕彰事業の流れを理解していただくために、秘宝展示などを行いました。二〇〇回は講師による特別講演です。当初は宝曆治水を描いた小説「孤愁の岸」の作者である杉本苑子さんを予定していましたが、体調不良のため降板され

ました。それで急ぎ、鹿児島市会場で、近世史の第一人者であり尚古集成館の前館長の芳即正さんに、国分市会場では鹿児島大学教授の原口泉さんに講演を依頼し、大盛況となりました。そして三〇〇回は、恒例になっている慰霊祭の開催です。海津町では、自転車つなぐ友好の絆「薩摩義士の凱旋」として、一般公募者を含めた海津町青年のつどい協議会らが四月二十五日に治水神社を出発し、自転車で行くしながら、五月二十五日には鹿児島市で開催した薩摩義士二五〇年祭典前に「コル」され、また、彼らを温かくお迎えすることも大切な顕彰活動です。これからは宝曆治水の意義を若い世代に語り伝えながら、顕彰活動を未永く続けていきたいと思っています。

鹿児島市の平田公園で、薩摩義士二五〇年祭（鹿児島県薩摩義士顕彰会主催）が開催されました。岐阜・三重両県と鹿児島県の関係者をはじめ中・高校生を含む約七〇〇人が参列、友好の絆を深めつつ、偉業を後世に伝えていくことを確かめました。

式典に先立ち午前九時三〇分、岐阜県海津町からの自転車リレーの最終走者が到着。花火と大きな拍手で迎えられました。海津町青年のつどい協議会会員らが中心となって企画された、薩摩義士二五〇年目の凱旋は、工事に赴いた薩摩藩士たちの行程約六三〇kmを、七〇人がたすきをうなぎ一ヶ月かけてたすきといふもの。陣羽

織姿の永田実彦協議会委員長は、義士への報恩感謝の強い絆が薩摩への道を作り上げました。リレーを通して義士への想いが感じられたように思います。これからも友好を深め、絆を強くしていきたいと感涙にむせびながら奉納文を読み上げました。

式典で謝辞を述べた海津町立日新中三年の水谷哲也君は、左足骨折をおしての鹿児島訪問。「義士の偉業を僕たちが大切に、後輩たちに伝えていきたい。これからも鹿児島国分との交流の輪を深めたい」と力強い口調でスピーチしました。

その他、東郷示現流と薬丸野太刀自願流による古武道と詩吟なども奉納されました。



平田公園正面



ゴールに向かう自転車リレーの皆さん



式典状況



ゴールの報告をする協議会委員長 永田実彦氏



謝辞を述べる海津町立日新中三年の水谷哲也君



詩吟の奉納

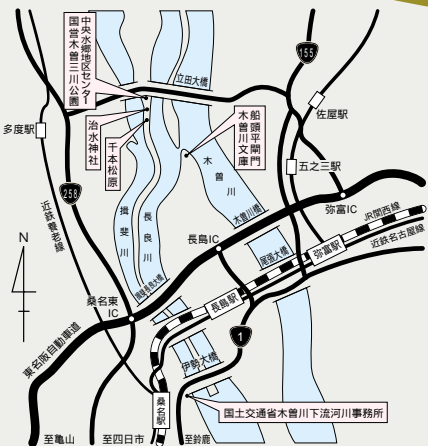


東郷示現流による古武道の奉納



薩摩義士碑（鹿児島市城山町）

木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平開門管理所・木曾川文庫
〒496-0947 愛知県海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



表紙写真 上左：平田朝負翁銅像（鹿児島市平田公園） 上右：宝暦治水碑 中：治水神社 下：朝燻けの桜島

編集後記

弊紙では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。宝暦治水特集号の編集にあたっては、島津修久氏、林董一氏、黒田安雄氏をはじめ多くの方々のご協力を頂きました。ありがとうございました。

今回は愛知県海部郡立田村を特集します。宛先「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>